

は2021年8月には約18%。スターリンクが今後10000基に達すると全観測画像に映り込む可能性も否めない。そう天文学者たちは危惧している。

部活は地域スポーツ団体に？
現在の学校は部活動の顧問になると土日休みなしというブラック職場だそうです。さらに生徒数も減少で部活自

体が成り立たない学校もあると言います。この移行は奨励されますが、ただ地域の受け入れ態勢、指導者、会費(参加費)などに課題が残ります。

ドラゴンへの階段 第37回 (連載エッセイ版)

「生きるとは争うことなのか」 佐藤 洋祐

暦の上では初夏を経、平穏な日々を過ごすうちに原稿を書く今日になりました。今回は挿絵担当者の絵が先に仕上がりました。同じカラ系ながら種の異なるヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラが、お互いの食事の量をできるだけ公平に分け合おうと相談している絵。小林一茶の俳句に触れ、また折から起きている国どうしの争いに感じるところがあつてペンが動いたそうです。では文章の方も、今回はこのコミニティどうしの争い、戦争という言葉について心に現れる思いを書き連ねます。いろいろな考えのあろうテーマです、もしお読みくださって賛同しかねる、不愉快であるとお感じになられる様でしたら、常々自覚します通り浅はかな愚か者の雑感です、読み飛ばしてくださいましたら幸いです。

この世に生命が誕生して以来、生命どうしの戦いが絶え間なく繰り返されているのは事実です。肉食動物は草食動物を捕食し、その肉食動物も争いの結果捕食されることもありま。私たちは人間も生きるものを捕らえ、または採取して食べますがその際には必ず命の攻防があります。人間どうしは国というコミニティ単位で、違うコミニティと戦う、つまり戦争をすることもありますが、それは他の動物の世界でも当然在ります。アリ、ハチ、ライオン、サル、タヌキ、書ききれませんが、縄張りを主張し合う群れの衝突は日常の事です。植物どうしでさえ、より多くの太陽光をめぐって隣の植物より優位に立つため、より高く育つべく争います。争いに敗れたものには生命力の欠乏があり、その極限には死があります。こうして、ありとあらゆる命は争います。

人に限らず、あらゆる生命は快楽を求め、苦痛を遠ざけたい。己と己の子孫、己の愛する者には快楽を少しでも掻き寄せ、苦痛はそれ以外の他者の方に押し付けたい。生命はそのように創られているのです。命がこの世に誕生した時点でそのようにプログラムされている、とも言えるでしょう。



むらびや どれが四雀、五雀(一茶)

よく、「人間は愚かだ、昔から、学ぶことなく同じ争いを繰り返している」という言葉を耳にします。しかし、よく考えれば人間に限らず全ての生命は絶えず争いを繰り返しますから、この点について人間だけが特に愚かであるとは思いません。また、近頃は「自らの欲望のために他国を侵略して、国際ルールを破って、愚か者がいる」というご意見もよく聞かれ、おっしゃる意味は推察申し上げますが全面的には賛同しかねるところもあります。あらゆる生き物、私も含めてあらゆる人間が、大なり小なり私利のために行動し、同時に人、国によって道理も様々です。道理が違えば、正義も違う、従ってルールも異なるのです。私たちの住む日本では、いわゆる西側経済、資本主義自由経済の考え方を礎に道理を導きますが、そんな経済のもとに生きる人の数は地球人口約80億人の半数には及びませんし、その割合は減少しています。私が使う百均で買う輪ゴムを産出する貧しい国の労働者の方々は、何の不自由もない(かも知れない)私の暮らしぶりをインターネットで垣間見て羨み、こんな世の中の仕組みは間違っている、不公平である、だから根底から覆せるならそうしたい、とお思いになるのが当たり前でしょう。社会主義国家のリーダーの考え方が、日本人の常識と合わない、これも当然の事です。彼らにしてみれば、私たちが愚か者、ということになります。こんな意見の合わない国どうしでも、「快楽を求め、苦痛を遠ざけたい」という全生命共通の望みについては間違いなく同じです。ですから、争い、戦争はこれまで絶えたことが無かった様に、何か「よっぽどなこと」が無ければそれはこのまま消えることがない、というのが正論でしょう。では、「よっぽどなこと」って何でしょう？私は、少しづつでも良いから、自分の生活にある快楽を手放し、よそにある苦痛をわざわざ手元に引っ張ってくる事が出来るでしょうか。それをいつの日かやり始めるのではなく、今、この瞬間から始められるでしょうか。それが出来ないのは、他の国の誰かさんや、自分の国の権力者や、自分よりお金を持っている人たちのせいなのでしょう。私に問い詰める窓の外で、シジュウカラのさえずりが、焚きつけられた火に小雨を降らすように、心を癒します。(2022年5月8日筆)

挿絵 TAKAKO

佐藤 洋祐(サトウ ヨウスケ)
ジャズミュージシャン。サクソフ奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。